

ルポ 失踪

逃げた人間はどのような
人生を送っているのか？

松本祐貴

「逃げる理由と少しの勇気

「が
あ
れ
ば失踪は
誰にでもできますよ」

失踪経験者が語る、「逃げた」先にあるものとは!?
知られざる実像を徹底調査!

ルポ失踪

逃げた人間はどのような人生を送っているのか？

松本祐貴

星海社

354



SEIKAISHA
SHINSHO

「日本から、そんなふうにして遠ざかり、忘れられてゆくことは、はじめのうちこそ少々淋しい気もしたが、それですむものならば、その方が気らくでもあったし、決してわるいものではなかった」

『詩人 金子光晴自伝』 金子光晴（平凡社）より

「失踪^{しっそう}」という響きにはどこことなく魅力がある。

この本を手にとった読者は「失踪したい」と思ったことがあるだろうか。この場合の失踪とは、自らの意思で住んでいた場所や生活していた社会からいなくなることだ。

もちろん生きていれば悪いことや嫌なことはある。憎らしい人もいる。仕事や家庭、学校でどうにもならない状況も一度や二度あるだろう。そんなときに「逃げ出したい」「消えてしまいたい」「仕事や勉強を放り出したい」「責任を取りたくない」「旅に出たい」と思うのが人間だ。

それが一時的なものであれば、買い物や趣味、スポーツなどでストレス発散するのがいいだろう。温泉に行ったり、国内外の旅行で忘れるのもひとつの方法だ。

そんなことをしても、家族や人間関係、職場や学校での問題がまったく解決せず、自殺

が思い浮かぶほど追い込まれたとき「失踪」という選択肢が浮かんでくる。失踪とは人生を生き直すための最終手段でもある。

私自身は、大半の読者と同じく失踪したことはない。せいぜい小規模な家出や長期旅行の経験があるだけだ。その上、周りに失踪の経験者はいなかった。失踪は非日常の出来事だったのだ。

それゆえ、人生の大勝負である失踪に憧^{あこが}れる気持ちがあったのかもしれない。

すべての人間関係をリセットし、別の人間として生き直す。新しい仕事をして、恋人と出会い、結婚をする。自分の性格も生き方も変えて、知り合いが誰もいない世界に踏み出す——そんなことは果たして可能なのだろうか。

もともと、実際の失踪は普通の人にはあまり縁のない話だと思うかもしれない。だが、警察庁が発表した『令和5年における行方不明者の状況』によると、行方不明者は9万144人。この数だけでいうと、日本の人口の約1200人に1人ほどが毎年失踪していることになる。「年間9万人が捜索願を出される」と聞くと衝撃的だ。

少し考えてみてほしい。あなたの身の回りにも、数年、数十年連絡がとれない人がいな

いだろうか。例えば、友人の知り合い、遠い親戚、職場ですれ違った人……。自分の肌感覚でいえば同じ学校の1学年に1人。200人に1人ぐらゐは失踪者がいるのではないだろうか。みなさんも小中高と同級生を思い浮かべてみれば、卒業後連絡がとれない人物が思い当たるだろう。数十年間の失踪者が蓄積すると、200人に1人といった肌感覚の数字に近づいてくる。

実際、著者も取材を進めるにしたがつて、失踪は意外に起こっているのではない始めた。

本書で扱う失踪経験者とは、一度失踪し、現在は社会復帰をしている人となる。周囲の編集者・ライター・友人・知人などへ協力を呼びかけたが取材対象者の発見は困難を極めた。あるときは、か細いつてをたどり、経験者にコンタクトはとれても、取材を断られた。もはやこれまでと本書の企画をあきらめかけたこともあった……。

だが、旧知の編集者が蜘蛛の糸のようにひとりの失踪経験者を紹介してくれた。実際に会ってみた失踪経験者たちは常軌を逸した人生を送っていて、とても刺激的だった。

最初の取材は、第5章に登場する篠田誠さんだった。居酒屋でレモンサワーを飲みながら話す彼の暴力事件はどんな架空のドラマよりも私の興味をひいた。第6章の酒井よし彦

さんとは何度も仕事をしたことがあったが、本書にあるフランスでアルジェリア人スリ団に入って生活していた話は初めて聞いた。

ほかにも元AV男優、風俗嬢、半グレ組織関係者などツワモノが集まり、失踪した話を聞かせてくれた。

「なぜその人は失踪をしたのか」

私はその理由がとても気になる。

本書は失踪者と残された家族に失踪の理由を「なぜ」と聞き続けた本である。

失踪者たちは、逃げ出した理由を包み隠さず話してくれた。それらは借金や離婚、うつ病や飛行機に乗り遅れたからなどである。

本書では彼らひとりひとりの人物像と人生を1章ごとの物語として構成した。また第3章では「高齢者の認知症と行方不明」の問題を専門家とともに考えている。

本書を読むと、職場や学校、親子関係、友人との縁を切って、失踪を選んだ気持ちを知ることができる。

「逃げる理由と少しの勇気があれば、失踪は誰にでもできますよ」

この言葉はある失踪者の取材中のつぶやきだ。その言葉の通り、失踪を選びとった人たちのスリルと挫折ざせつと成功が入り混じった物語を読んでほしい。

【追記】

※本書では行方不明者届（旧搜索願そうさくがん）もしくは失踪届の提出の有無にかかわらず、失踪という状況にあてはまる人であれば、取材対象とした。例えば、本人が書き置きもせず家出をして、30年間一度も実家に連絡をとっていないケースを「失踪」と判断している。これは年間9万件近くの行方不明者届以上に、失踪が身近に起こっているからでもある。

目次

まえがき 4

第

1

章

30年間実家に帰らず

父と死別したAV男優

高級クラブで起きた発砲事件 16

小学3年生のときに実の母親が失踪 18

30年間一度も実家に帰っていない——突然の失踪 21

AV業界を目指して「土下座」で男優デビュー 23

借金を契機に50代で再び失踪 29

父の死と失踪を選択したがゆえの後悔 32

コラム 失踪者の教訓 住民票・戸籍編 37

父の失踪 18歳から風俗で

働く娘を誰よりも愛していた

血がつながっていないお父さん 40

幼少期からヤングケアラーとして家事をこなす 41

母の浪費癖のせいで、高校を中退 42

18歳で風俗嬢へ。月に50万円以上を母に渡す 44

あらゆる風俗で働き、現在はSMショーに出演 47

月緒27歳のときに父が失踪 49

多額のお金をつぎこんだ母の死 54

9歳で性暴力を受けたという突然の告白 58

「人はいつかなくなる」残された家族の言葉 60

きつと父親は自慢の娘と思っていた 65

コラム 失踪者の教訓 行方不明者届編 68

突然、妻がいなくなった――

認知症行方不明の課題

行方不明者は年間9万人だが半数は当日に発見 70

2023年の認知症やその疑いによる行方不明者は延べ1万9039人 72

認知症当事者と向き合う家族たち 74

80代で行方不明となった著者の祖母 81

鳥取県の荒川泰子さんが2023年から行方不明に 83

薬物でスリップと失踪を繰り返す

89

名門私立中学で不良ごっこに明け暮れる 90

編入した定時制高校で薬物を覚える 93

逃亡生活をしながら初めての結婚 99

初めての夜逃げ。金で揉めて襲撃される 104

心機一転で会社を設立するも、またもやスリップ 109

元闇金、詐欺師が跋扈する不動産営業の世界 111

子どもが生まれ、一切薬物を断つ 117

コラム 失踪者の教訓 失踪準備編 122

持ち前の正義感で

人を傷つける事件を起こす

失踪経験者は傷害事件の加害者だった 124

豪農に生まれ、やんちゃな青春を送る 125

子宝にも恵まれ、つかの間の幸せが訪れる 127

家庭を顧みず、毎晩夜中まで残業 131

記憶が飛ぶほどの怒りと暴力 134

懲役1年、執行猶予5年の判決 138

依存への代償!? 携帯ゲーム代が月額78万円 141

葬儀屋を転々とし、最後は「乞食以下」に 143

『坊っちゃん』も愛がなければ失踪していたのかも 146

コラム 失踪者の教訓 故郷編 150

オカマバー、闇金、ホストを経験し、
フランスでスリ集団として暮らす

15歳で家出してトイレの換気扇の営業へ 152

小学校時代は友達とも話さなかった 153

絵画、文学、音楽に目覚め、野良猫殺しをやめる 156

高校を中退し、新宿2丁目のオカマバーで働く 159

フランスで失踪し、不法移民スリ団の一員に 162

4年間で200人!? 自己承認欲求からセックス依存症へ 166

闇金で稼ぐが指名手配になり離島へ失踪 168

風俗雑誌の広告営業を経てカメラマンで独立 176

家庭の幸せがないほうが人生がうまくいく 182

「辛かったら逃げていい……」を若者に伝え続ける 185

コラム 失踪者の教訓 失踪のススメ編 187

おわりに 189

DISAPPEARANCE

CASE 1

氏 名 にし 西 だ 田 ひで 英 き 樹

年 齡 57 歳

現 在 の 職 業

ウェブ会社社員

父と死別したAV男優

30年間実家に帰らず

高級クラブで起きた発砲事件

1978年、関西地方にある高級クラブで銃撃事件が起きた。

ヤクザの組長がライバルの組の鉄砲玉に撃たれたのだ。組長の行動は数カ月前から監視されていて、筒抜けだった。

この大きなクラブでは、生バンドによるダンスショーがあり、ときには芸能人もステージに立った。

その日は華やかなショーが終わるやいなや「パンパン」と銃火が炸裂した。周囲の人物はショーの演出だと思った。

実際には人が倒れていた。銃弾は、組長の首を貫き、一般人も負傷させた。当時、店には50人ほどの客がいた。

その撃たれた組長の横についていたホステスが母。クラブの店長をしていたのが父という数奇な運命を持つ人物がいる。この章の主人公・西田英樹（仮名）だ。

幸い組長の命は助かった。撃った男は逃走したが、数カ月後死体で発見された。

後に英樹が母に聞いたところ「銃声はクラッカーか、花火みたいで、たいしたことはなかったわよ」と答えていた。ただ、眼の前で人が撃たれる姿は、この母子の人生に影響を

与えなかったのだろうか。

銃撃事件から遡^{さかのぼ}ること10年前の1968年、西田英樹は関西地方のある都市で生まれた。両親は前述の通り、水商売をしていた。共働きの両親は、夕方以降の育児が難しく、英樹は1歳から小学校にあがるまで、関東地方にいた母方の祖母にあずけられることになる。というのも、1歳になる前に自宅でタバコの吸殻^{すいがら}を口に入れてしまい、泡を吹いていたことがあったからだ。すぐさま病院に担ぎ込まれ、命はとりとめた。

関東地方では、母の弟である叔父と3人の団地暮らしだったが、おばあちゃんは優しく、甘やかされた記憶が残っている。生まれたときから英樹は虚弱体質で、栄養失調になったこともあった。

小学校にあがるタイミングで、英樹は関西に連れ戻された。言葉、文化の違いを体感した。

今度は父方の祖母に育てられることになる。祖母はとても厳しく、関西の言葉が話せない英樹は気に入らなかった。ただし祖母は早くに夫を戦争で亡くし、行商をやりながら子ども5人を育てた。厳しさも愛情の裏返しだったのかもしれない。

両親は夜の仕事を続けていて、あまり家にいなかった。家族揃って食事をするのはお正月ぐらいで、いわゆる一家団欒だんらんは夢物語のように遠かった。

小学校では、おとなしく、ひ弱な子どもだった。関西弁が話せず、仲間に入ることに気がひけ、英樹は疎外感を感じていた。

それでも、女の子のことはすぐに好きになった。覚えているひとりは、洋風の人形みたいにかわいらしい子だった。小学校では運動ができるやんちゃ坊主がモテる。脆弱ぜいじやくな体の英樹は女の子に次々と振られ、初の挫折を感じた。

何時間も集中はできなかったが、ある程度の勉強は好きだった。中学になってからは、アイドルにハマリ、吉田拓郎や浜田省吾、松山千春などの音楽を知り、勉強をしなくなっていた。

小学3年生のときに実の母親が失踪

英樹の母は小学3年生のときに失踪した。母は自力でスナックを経営したが、人に騙だまされ、借金を抱えてしまったのだ。ひとり息子にも経済的な迷惑がかかると考えた母は離婚

をして、家を出て行った。

翌年からいなくなった母の代わりに、クラブで働いていた女性が家に住むようになった。数年後、父はその女性と再婚する。英樹は「大人にはいろんな事情があるんだろうな」と醒めた目で見ている。

高校2年生になった英樹は、若気のいたりで家出をし、実母のもとに向かった。母は名前を変え、関東地方のボロアパートに暮らしていた。1週間ほど一緒にいたが、みすぼらしい暮らしぶりに落胆を覚えた。

当時40代だったはずの母は、歯がボロボロでもっと年寄りに見えた。英樹はそれ以来、母とは会っていない。

家出が終わると、また実家に戻るしかない。義母とは直接のケンカはなかったが、ギスギスとした関係だった。

高校時代には毎月5000円の小遣いをもらっていた。そのお金でレコードや雑誌を買い、街で遊んだ。『おニャン子クラブ』にハマリ、大学受験のときには浪人をした。

英樹は性的な冒険心が豊かだった。当時住んでいた街の繁華街には映画館があり、学校

をサボっては通っていた。

英樹が好きだったのはピンク映画だ。眼の前のスクリーンに、男女の痴態が大写しにされる。その情景を脳に記録しては妄想につなげる。

ある日、ピンク映画館の客席で英樹の近くに座ったのは50歳近いパンチパーマのおじさんだった。

「おじさんは、一番端の席に座っていたんですけどね。僕をターゲットに決めたのか、少しずつ近寄ってきました。気づいたら隣にいました。逃げようがなくて、ズボンから性器を出させられて、いきなりくわえられたんです」

初体験だった。抗おうとしたが好奇心に負け、受け入れた。

目を閉じればめくるめく快感だ。背徳的な性の悦びを感じながら英樹は果てた。

男は「オレのモノも触ってくれ！」とさらに迫ってきた。英樹は、映画館の外に出て、自転車に飛び乗り逃げた。

英樹の人生を運命づけたかのような初体験だった。

30年間一度も実家に帰っていない——突然の失踪

地元の大学を卒業した英樹は25歳になっていた。就職はしなかった。

クラブの店長を務めていた父は、その後カラオケスナックを開業し、ほかにイベント会社などを経営していた。大学卒業後、英樹は父のスナックの仕事を手伝った。

仕事を始めると、父は厳しく英樹の私生活にまで口を出してくる。しかも、スナックのママは、折り合いの悪い義理の母親である。義母は「だらしない」「ちゃんとしなさい」などと叱責する。家では父が口うるさく、スナックでは義母に責められる。家庭でも職場でもしかられるのは堪^{こた}える。「もうやってられない……」英樹は精神的にも追い詰められた。25歳のある日、父とケンカをして「家を出る」と決めた。

「家族に干渉^{かんしょう}されずにひとりで生きていきたい」

それだけが望みだった。ポストンバッグに荷物を詰め込んだら、玄関口には英樹を育ててくれた祖母がいた。

「オレ、出ていくわ」

そう言い残し、今にいたるまでの30年間、一度も実家の敷居はまたいでいない。ただ祖母のあきらめにも似た表情を思い出すだけだ。

時は1993年の7月。突発的な家出であり、失踪だった。

すぐに大阪に行き、家賃1万5000円のボロ長屋を見つけるとテレフォンアポイントの仕事をした。

20代独身で彼女はいない。健康な男子であれば悪所にも通いたくなる。小柄で童顔の英樹であつたから、そこそこ女性にも好かれた。

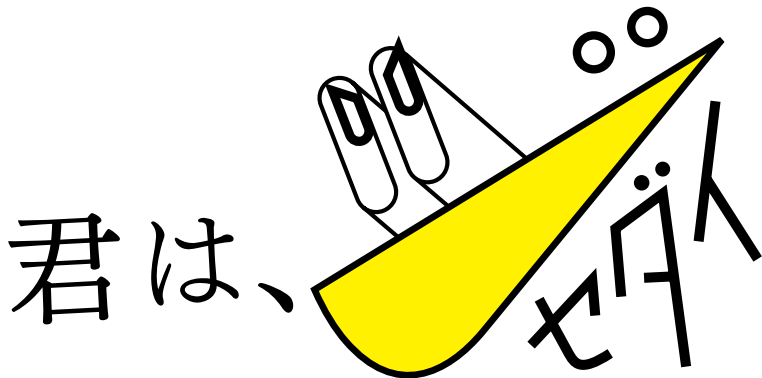
ちよんの間で知られる飛田遊郭につぐ大きさであつた松島新地に遊びに行った。

なんとその遊女と仲良くなると、彼女が家に泊まりに来た。人生の椿事^{ちんじ}で、英樹は浮かれまくっていた。

「オレの人生は、テレアポで終わるわけにいかない！」

妙な自信が芽生え、会社に行かなくなってしまった。

手元に給料が入ってこなければ、干上がるのも早い。10月には生活用品を整え始めたアパートから夜逃げすることを決めた。新地の女性とはうまくいかず別れた。短い大阪生活だった。



何と闘うか？
<https://ji-sedai.jp>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、
行動機会提案サイトです。読む→考える→行
動する。このサイクルを、困難な時代にあっ
ても前向きに自分の人生を切り開いていこう
とする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ

ジセダイイベント

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月
開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

ジセダイ総研

若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。
「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

星海社新書試し読み

既刊・新刊を含む、
すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!